

開拓農業に従事していた。ところが戦況が敗戦に傾きかけた昭和二十年の夏、主人は召集を受け入隊した。

それから間もない八月には、開拓団と訣別する日が訪れ、避難中に愛児をはじめ義姉とその子供を亡くし、約一カ年の悲惨な流浪と越冬生活の末、九死に一生を得て満州から引き揚げた女性の一人である。

帰国後、大八洲開拓団の生き残りが国内開拓を志し、茨城県東茨城郡内原に待機中の同士の傘下に単独加わり、昭和二十一年十一月菅生村に再入植した利根川沿いの常習水害地である、菅生沼開拓に辛酸をなめ、続く山林の開墾にも苦難を重ね頑張り抜いてきた仲野さんは、開拓女性の範である。

応召した夫の無事を祈り、復員を待ち続けてきたその念願も空しく、戦死したため悲しい思いを秘めながら、現在の主人と一から出直し、貧しく苦渋な開拓生活が続けながらも、皆と協力して酪農経営の基盤を築き上げたのである。

農作業に追われる毎日で、子供の養育どころではなかったが、今は三人とも成長してそれぞれ家庭を持ち、

元気でやっており、特に長男夫婦は後継者として厳しい現下の農業情勢にもかかわらず、酪農経営の持続発展に専心している。

たのもしい家庭は、若くして開拓の主婦として長年にわたり苦勞し努力してきた結果にほかならないと、その健気な精神に深く敬意を表するとともに、今後ますますの健康と幸福が訪れますよう心から願う次第です。

(大八洲開拓農業協同組合)

代表理事組合長 石田 時雄)

満州引揚げから再開拓への道

茨城県 田中 栄一郎

昭和二十一年十月の末、米沢市七軒町の父方の伯母須藤とみ宅の玄関前に、みすばらしい姿で立つ三人の男の子は、栄一郎(十五歳)、弘雄(十三歳)、照夫(十二歳)の兄弟である。

過ぎし昭和十四年一月、満州三江省樺川県柳樹河大八洲開拓団に入植した父（長治）が、家族召致のため、同年十月末に帰国したので、一家八人満州への期待に胸をふくらませての出発の際、同家の前で記念写真を撮影して渡満となった。

だれもが七年後にこんな姿で涙の再会とは、夢想だにしなかったはず。凍土の下に眠る曾祖母、祖父母と母を残し、シベリアに連行されたと思われる父の消息を案じながら、三人の兄弟と妹の文子（七歳）四人だけが、大八洲開拓団の家族一行の皆様に支えていただき、日本の土を踏んだのでした。

昭和五年山形県米沢市の山奥、綱木という福島県の境にある山村で、五人兄妹の長男に生まれた。小学校四年生の二学期まで、綱木小学校に通学し、山に川にと遊び回っていた。家族は、養蚕と製炭業で生活しておりましたが、父親は常々、開拓移民の話を目にして満州開拓に夢を持ち、その機会を待っていたようです。

昭和十四年一月、満州開拓第一次弥栄開拓団の団員であった佐藤孝治団長が、弥栄の分村開拓団（大八洲

開拓団）を創るため、故郷の山形県下より希望者を募集しているという話を聞いて、時期到来とばかりに父は、友人の加藤勇、伊藤貞蔵、今野今朝吉氏らと共に渡満、入植した。その父の元に一家が渡満することになったわけです。

米坂線經由で新津へと、初めて乗った汽車の旅で新津に一泊、同じく入団する渡辺良助、市川重吾さんたちと合流し、見送りにきてくれた皆さんと別れの夜を過ごし、翌日新潟より「サイベリヤ丸」に乗船、見送りの人とテープを交わして出港、いよいよ満州への旅立ちとなった。

あいにく天気が悪く、出港後間もなく、日本海は荒波が強く、船は木の葉のごとく揺れた。

海が初めての私たち一行は、船酔いで生きた心地もしないほど、船中で右に左にゴロゴロと転げ回り食事どころではなかった。朝鮮の清津に入港し、やれやれと思つて上陸したものの、一同ふらふらの状態で歩けなくて、お互い笑い合ったことが思い出されず。

次の日は市内見物で、名所を見て回る途中、弟が迷

子になり大騒ぎをしたことや、甘栗の店が多かったことが今だに記憶に残っています。

翌日は凶們へ。凶佳線にて目的地に向かう列車内は、皆他国人で言葉も分からず、ニンニクの臭いと異様な熱気を感じたが、私たち兄弟はいよいよ満州にきたんだと喜び勇んで車内を歩いたり、外を眺めていて車窓から新調の帽子を飛ばしてしまい、親に叱られたりのも有様でした。

明け方近くになり、身の回りの荷物をまとめ下車準備にかかり、目的地の千振駅ちぶりに近くなった様子に、私たち兄弟は喜んで「千振千振フレフレ千振」と訳も分からないことを言っていて騒ぎ回り、迷惑をかける始末であった。

早朝、千振駅に下車、満州の地に第一歩をしるす。

さすがに寒く身にしみる冷たさ、駅前に出ると団の方が馬車で迎えにきてくれた。約六キロの道を初めて乗った馬車にゴトゴト揺られながら、一時間少々ぐらいでこれから第二の故郷となる柳樹河に到着した。共同宿舎の前で下車した。庭には日の丸の旗が揚がっ

ており、昭和十四年十一月三日明治節（現文化の日）の朝であった。

当日から私たちは物珍しさでいっぱい。満州人の住宅が多い屯子じふ（集落）の内外を毎日遊び回って一週間ほどたつてから、弥栄村の小学校に就学することになった。当時、大八洲には何カ月か前にきていた「加藤保さん」兄弟と、私の兄弟だけでした。寄宿舎生活をしながらの通学で、週一回の帰宅が何よりの楽しみで、上級生の案内で親元へ帰ったものです。昭和十六年十二月に大八洲在満国民学校が開校し、教師は二人、一年生から高等科二年生まで全校生十八人であった。

私は六年生の三学期から自宅から通学するようになったので、友達と付近の川や沼に魚とりや裸馬に乗り、原野を駆け回るといった勉強そっちのけの生活で、毎日を楽しく過ごした。

高等科も卒業間近になり、今後の進路を決めねばならなくなった。そのとき先生から「満州中隊という現地入隊の義勇軍がある」と聞かされ、自分はそのつもりでいたところ、同居していた佐藤齊さんに「義勇軍

に入るよりも近くの千振開拓団に農業学校があるから、入学して勉強した方が家に近く、いろいろな面で有利でないか」と勧められ、一決して受験した結果、同級生の滝口登美三君と二人が、昭和十九年四月入学した。

入学式の前日、滝口君の父と佐藤齊さんに付き添われ、十三キロメートル離れた学校に出发し、湖南宮の街で記念写真を撮った。この写真が、終戦引揚げのため無一物になったわが家に今存在する。当時父が内地の親戚に送ってあったと思う、私の在満最後の写真です。

翌日街から南方四キロメートルくらいにある、学校の入学式に徒歩で出発し、式後寮の所属班にお世話になった。学生は全員が寮生活で、私は八紘寮の第六班に所属、第四期生として同級生は二十数人であった。

この学校は本来、開拓者の子弟養成校として創立されたものですが、そのころは戦争中のため軍事教練が目標のような感じがした。連日、朝の点呼に始まり朝礼、食事、作業、夜の点呼と全部ラッパの合図、内容を全く知らなかった新入生には、面食らうばかりの生

活。雨が降らない日は、毎日鋤耨じようちうを担いで蒔き付けや除草、正に晴耕雨読といった日を送るうち、無我夢中で一年間が過ぎてしまった。

昭和二十年四月、どうにか二年生に進級し、新入生を迎え上級生となって少々落ち着き、気持ちも楽になり寮生活にも余裕ができ、毎日楽しく過ごせるようになった。ところが間もない四月末に、突然に職員室に呼び出され「自宅から電話があり、父が出征することになったから早速帰宅しなさい」と伝えられ、びっくりし帰省した。

兵役に関係がない父がと不思議に思いながら帰宅すると、団員の過半数が応召した話を聞き不審に思いながらも、日本が戦争に負けるとは夢にも思わず、父を見送り帰校した。

八月から、待っていた夏期休暇に入ったが、農学校であるから家畜の世話や農耕作業のため、全員が一斉に休むことができず、前半と後半に分かれて休むことになった。私は後半組に編入され八月十五日以降のため、三十数人ほどの人員と居残り、家畜管理や農事に

と働いていました。

終戦、そして避難の道へ

一日の疲れでぐっすりとお眠っていた夜半、突如宿直の三年生に起こされる。当時、先生方も大半召集され、残った先生も夜は自宅に帰り、三年生が責任者で寮に泊まっていた。何事かと飛び起き、全員が食堂に集合したところ、三年生の岡田、折笠、田沢、太田さんたちの説明があった。「今千振警察署より電話があり、『武器一切を持ち出し、書類などはできる限り始末し、千振警察署に集結せよ』と連絡を受けたので、直ちに準備して出発する」と言われたのが八月十二日の夜半でした。早速、全員が真っ暗い中を武器倉庫より軽機関銃やソ連製の小銃などを馬車に積み、職員室内の書類などを焼き払い、夜明け前の暗がりをお湖南宮に向かって出発した。

夜明け早々に警察署に到着。兵事係の村上さんという警察官から、重大な戦況である旨の話があり、「君たちは学生隊として湖南宮街の警備に着くよう、その前に実弾射撃の訓練を行う」というので、野外に出て

五発ずつの射撃訓練を終えて、早速千振小学校に出発し警備に当たった。

到着して驚いたことには、校庭はもちろん、周りは付近の開拓地から集結した日本人家族でいっぱいであった。聞くところでは、列車で南下する予定で千振駅に集結したが、牡丹江の鉄橋が爆破され列車不通のため、徒歩で依蘭を通り、珠河より列車でハルビン、新京、奉天と南下し内地に帰るとのこと、学生隊が警備に出されたことが初めて分かり、時局の重大さを感じた。その日の午後、学校の金庫内の現金や書類などを持ち出すため、十人ぐらいの学生が学校に行った（前夜は鍵が見付からず、そのまま出発した）。今度はドアを壊してでもということになり、行って見ると何者かに荒らされて金庫の中には何も無い状態で、仕方なく引き返し警備に就いた。

あるとき、突然開拓団の人に出会った。大八洲開拓団も全員が同じく列車に乗る予定で来たが、列車に乗れなくて湖南宮に集結しているという。早速村上さんや上級生に話すと、家族のきている者は同行してよろ

しいと許可があり、私は開拓団の人たちと一緒に
た。

話によると、大八洲開拓団も「根こそぎ動員」で、
壮年の男子は六人のみとなり、その人たちを中心に散
在する各地区の家族を本部に集結し、集まった老人、
婦女子で重大時局突破のため、営農に頑張っていたが、
八月十四日警察署より千振駅に集結の命令を受け、十
数台の馬車に荷物や老人、子供を分乗し、現地の人に
見送られ住み慣れた第二の故郷を後ろ髪を引かれる思
いで、出発してきたとのことであった。

八月十五日には依蘭に向かって出発した。大八洲開
拓団の総員二百人その他各地区から集まった二十人ぐ
らいと思う集団が、長蛇の列をなしての避難の旅が始
まったのである。午後九時ごろには大平鎮に到着し仮
眠する。

八月十六日、警察官の命令で治安不良のため夜明け
前に出発したが、暴民の急襲に遭い、団の家族のうち
最初の犠牲者が出る。翌十七日午後三時ごろ、第一目
的地の依蘭街に入ったところ、上空にきた飛行機から

日本敗戦のビラが撒かれたが、そのときは、だれも信
じなくて日本人学校に宿泊する。午後六時ごろ、学生
隊数人と立哨警備中に二人の日本兵が尋ねてきて「大
八洲開拓団がきていないか」と言うので、見ると父だっ
たのでびっくりした。伝令任務の帰路、開拓地からの
避難者が多勢いると聞き、もしやと思って尋ねてきた
そうで、早速案内して家族と面会した。それが母や祖
父との最期の別れになるとは露知らず、再会を約して
帰って行った。

八月十八日ソ連軍の砲撃に遭い、ほうほうの体で逃
げ出したが、牡丹江河の橋が爆破され渡るに渡れず船
を頼んで渡るほかになく、引率者の警察官や学生隊の上
級生が走り回ってようやく見付けて船を頼んだが、こ
の地点では危険といふので、上流に移動するため出発
した。ところが、街を出て少し行った所で、左方面の
建物から一斉銃撃を受け、無防備の難民はバタバタと
倒れた。何とかその場を逃れたが、相当数の死傷者が
出た様子であった。確かめる暇もなく渡河に移り、数
時間後に渡り終わったが、日は落ちて辺りは真っ暗に

なった。私たち学生隊は最後に渡ったので、その夜は河畔の柳の下で野営した。

夜中に突然馬蹄の響きと甲高い声に目を覚ますと、周りを暴徒に囲まれて持ち物や小銃を無理やり持っていかれた。そのとき三年生の岡田さんが行方不明になった。この渡河のために家族たちと離れてしまい、学生隊の諸君二十人ほどと行動を共にすることになった。

八月二十一日には長い避難民の行列が、連日の強行軍で、疲れ果て、道路の側で体を休ませていたところ突然ソ連軍の自動車隊と遭遇した。私の団の者は一行の前方を歩いていたので、逃げも隠れもできずそのまま前進した。私は学生隊と一緒に殿の警備をといわれ、団の加藤保さんと歩いていたので、後方の人たちの「ソ連軍がきた。早く山の中へ」という騒ぎを聞くや一目散に山中へ逃げ込んだ。それが原因で、この先「方正」越冬の道を歩むことになったわけです。私の家族はそのまま進み、幾多の苦難を団員家族の支えで凌ぎ、新京までたどり着き、越冬生活を送ることとなった。取り残された私は、一部の団員家族三十数人と共に行

動することになり、学生諸君と別れた。

大八洲の本隊と別れてから再会まで

大羅勒密だらかつにて先方に進んだ団の本隊と分離され退却して、鹿児島県開拓国民学校に避難した。午後二時ごろ出発し、夜行軍の道中では二時間ほど仮眠を取る。翌日二十二日未明に日本軍の仮宿舍の跡と思われる所に着く。本通りから割合近い所であるが危険という判断で、山を越えて方正に出ようということになり、午後三時ごろまで休息して牡丹江の上流を渡る準備をした。

川幅五十メートルほどに張られた一本のロープを頼りに川を渡ったが、老人、子供は押し流され鈴木つぎさんが溺死した。これでは危ないと集めた木材をつなぎ合わせ、筏を組んでやっと荷物や子供を運び終わり、河岸より少し行った場所まで野宿した。

翌朝早く道路に出て歩いて行くと、右方から二回射撃され、滝口登美三君が頭部に銃弾が貫通し即死した。農学校も同級で団内でも無二の親友が、目の前で戦死した悲惨な姿に遭い、やり切れない思いだったが、滝

口君を葬ることもできず申し訳ないと思ひながら、私
たちは命からがら現場から約四キロメートルばかり逃
げ出した地点で一時休んだ。道路を歩くのは危険と感
じ、一行は方角も分からないまま山中に入り、身を隠
し野宿した。翌朝十時ごろ出発したが道に迷い、再び
元の場所に舞い戻ったので、今度は川伝いに歩き、現
地人部落の見える場所で夜を過ごした。

次の日は、現地の人を道案内に雇い出発したけれど
も、再三元の場所に引き返したので、その日は現地人
部落に泊まった。

行きつ戻りつを繰り返す道中では、弱り果てた子供
もついに足手まといになり、一行に迷惑がかかると、
心を鬼にして山中に置き去りにして行く親たちも多
くなってきた。道に迷い、同じ場所を通るとき、蚊に刺
されながら、子どもの姿を見て泣き叫び、助けを求め
ていた子供をどうすることもできず、かわいそうにと
思いつつ通過した。

捨てられた子供の親たちが、あの避難群の中にいた
はず、その親の心中はいかばかりであったらうと今

だに、思い出すたび涙を禁じ得ないが、だれもが心を
鬼にせざるを得なかった当時の出来事を無念に思う。

この日も昨日の場所に野宿し、翌朝再度道案内を頼
み方正の街を目指して山中を歩き出し、道なき道を進
み、どのぐらい歩いたのか見当もつかないまま行き着
いた場所で、土砂降りの雨の中、野宿する。頭から腹
の中まで乾いたところがなく、全身ずぶ濡れとなり、
その上、口の中に入る雨で潤いを取り、連日の行動で
疲れきった体を、所かまわず草の上に横たえて眠った。
知らぬ間に眠り、朝の寒さで目が覚めたら、昨日と
打って変わったの好天に一同安堵した。

このころには、八月も末ごろだと思っただけで、月日
もうろ覚えで朝になると出発、道中山ぶどうや雨の濁
り水で飢えを凌ぎ一心に歩いた。所々に包米ポテト（トウモ
ロコシ）畑があったので断りなしにいただき、生のま
まかじりながら歩くうち、幾らか満腹を感じたころ方
正に近いことが分かり、しばらくぶりに大通りに出て
歩いたところ千山という所に着いた。ところがソ連兵
が警備している様子なので、すぐに山を下り二家里屯

に行った所で、丸腰の日本兵に出遭い、初めて終戦を知ったので、持ってきた小銃を土橋の下に捨て身軽になった。

その日は伊漢通開拓団まできて、国民学校で疲労した体を休めるため、二日間休養滞在した。朝伊漢通を出発。忘れもしない八月三十日、目的の方正に到着。興農合作社の倉庫に、久しぶりに安心して、ぐっすり休むことができた。

翌朝、ソ連軍の命で西雲部落（開拓跡地）まで引き返し、十月末ごろまで避難生活をした。その間は日本軍の残した米をソ連軍から配給されたので、千山付近まで運搬に通った。

そのうち西雲部落も危険になり、方正水利組合の跡に避難し、ここで越冬生活を送ることになった。やっと落ち着いた集団のうち、大八洲開拓団の家族は全部で三十四人であったが、そのほとんどが婦人と子供であった。それでも小部屋で多少狭苦しいが、ベチカがある南向きの部屋で割合に暖かく、避難中の野宿や苦しみを思うと喜ばずにはいられなかった。

いよいよ十一月になると一段と寒気は身に染みるばかりでなく、今までの配給の米は高粱コウリヤウに代わり、その量も次第に減少した。そしてわずかな残り残った現金も、少ない身の回りの品物も食物に換え、ただ一枚残った毛布にくるまって休む生活であった。ところが自警団とか何とかいって、夜中に押し入ってきた輩やからに、一枚の毛布まで持って行かれ、飢えと寒さに耐えられない病人は次第に増える有様であった。

秋には使役に出て大きな穴を掘ったが、死亡者が出るとその穴に次々と捨てられ、その穴も真冬にはいっばいになると、上から土をかぶせるだけで正常な人間としての感情はさらさらなく、仏を葬る気持ちも失っていた。誠に申し訳ない埋葬が行われたことは、今もなお痛心に堪えない。

当時は若かったし、比較的に丈夫でしたので、部屋の暖房に古材を集めてきて薪にしたり、離れた井戸の水汲み、煉瓦れんがを拾ってきてベチカの中で焼き「アンカ」代わりにして病人の暖をとったり、時には仕事があると満州人に雇われたり、比較的元気な今野勝男君たち

とできる限りのことはやってきたと思っっている。

いろいろと手を尽くしたが、そのうち一人二人と亡くなり二十号の病死者が出たので、このままでは犠牲者が増えるばかりと、南下することに意を決し無けなしの準備をした。

拾った麻袋に穴を開けて頭からかぶり、足にはポロ切れを巻き、古畳を探してきて中の藁を取り出し、加藤勇老に藁靴を作ってもらい、素足に履いて無一文無一物で出発したのが、二十一年二月十五日の夜であった。

方正の街を逃げ出すように団の者十四人は、寒い夜を歩き通し相当前進した積もりであったが、夜が明けを見ると脱出した水利組合が程遠くなく見える距離であった。その日一日を歩き続け、ある部落の現地人の好意で空き家に一泊した。

翌日は夾信子きょうしんしという部落に到着して、十日近く滞在することになった。実は裸で脱出したから宿代も払えないので、薪伐りや雑役などをやり、宿代と若干の旅費を稼ぐため、やむを得ない居座りであった。その間、

加藤老と今野君の三人で多少ながら働いて調達した現金を頼りに、延寿島の朝鮮義勇隊の世話で、満州人の旅館や柳河村の朝鮮義勇軍の分所、次の日は満鮮人の混同部落で食事と宿泊の厚意を受けた上、翌朝出発の際、現地の学校より現金四十五円の厚志をいただき、感謝と喜びで元氣を取り戻した。夕方には珠河街に到着し、朝鮮人旅館に宿泊した。珠河駅から列車でハルビンに行く予定であったが、一回通過した列車は停車せず、待っても列車がこなかったため、夜はやむなく満州人旅館に泊まった。

三月三日の朝、九時ごろの列車に乗車できたので、ハルビン駅に夕方近く下車、その夜は満系旅館に泊まった。翌日はハルビン民団本部の世話で寮に泊めてもらい、新京から大八洲の家族がきていないか尋ねてきていることを聞き、民団本部に行って問い合わせ、迎えにきた若松竹次郎さんに面会し、八月に別れた本隊の状況を聞くとともに、宿泊や食物の心配も忘れ、民団の指示により花園国民学校に宿泊した。夜は気持ちも体もゆっくり眠ることができた。

五日間の滞在中に乗車手続や体を休めることができなかったので、九日の午後ハルビン駅発に乗車、南下して、夜には新京（現長春）に着き駅前の旅館で泊まる。翌朝未明に旅館を出て、西陽区菊水町に向かい旧軍隊の官舎だったという建物で待っていた、佐藤団長はじめ大羅勒密で別れて以来、七カ月ぶりで同志の皆さんに迎えられた。再会の喜びは言葉にならず、ただただ涙が出るばかりであった。

特に、体の弱い病氣勝ちの母が、よもや生きて私を迎えてくれるとは、半ば諦めていただけに、あの時の喜びは忘れることはできない。

丈夫であったはずの祖父（喜太郎）たちが避難の途中、鎌や槍などを持った暴徒に襲われ、その際、頭や足に負った怪我がもとで、鈴木源七さんは新京に向かう途中ハルビンで亡くなり、祖父と高橋金八さんは十月にここ新京で亡くなっていた。八月十八日の牡丹江の渡河準備中にも、突然の流弾に柏木さんの奥さんが、大腿部貫通銃創で出血多量のため絶命したほか、本隊の家族も相当数亡くなられたのを知り、私たち方正越

冬組の不幸も不可抗力であったかと、気休めと無念の思いが交錯した。

私の母と兄弟妹とも無事であったので、周りの皆さんのお陰だと感謝とお礼の気持ちで胸がいっぱいになった。早速、避難中の垢を流すようにと風呂に入ったが、熱いはずの湯も体を感じないまま、何とか洗い落として入浴を終わり、心尽くしの米飯も何となく食べられなく、すぐ床に入った。長い間の疲労から解放されたこと、家族に再開できた安心感で、放心状態で眠りかけた。

そのころ、新京では佐藤団長を中心に、丈夫な者で味噌、醬油をはじめ濁酒、甘酒の速成醸造や加工場の釜の熱を利用し、葱の軟化栽培、豆芽菜などを作り市内に売り歩き、生活費と帰国の支度並びに帰還後の当座の生活資金稼ぎに日夜働きながら、ハルビンで列車に乗るとき、別れて奉天まで下り越冬中の団員家族の安否を気遣い、連絡や団員を派遣するなど、流浪避難の生活者とは思えない活気があった。

そのような中で私は気の緩みと溜まった疲労が一举

にて、四十日ほど病床に伏したが、大八洲開拓団の開拓医師として卒業近くまで、佳木斯医大に在学していた加藤恒夫氏が新京にきて近くにいたので、時々診察に来てくれるやら同志や母の看病によりお陰で元氣になった。その矢先、私の回復を喜んだ母が発病し、それでも帰国の噂を聞いて引揚げ証明の写真まで撮り、皆と共に帰還の日を待望していたが、出発の日を迎えず五月二十八日三十六歳の生涯を閉じた。

目前にした帰国の願いも空しく、再び郷土に戻れず空しい最期に母は悲しくつらい思いであったと察し、五十余年後の今も胸が深く痛む自分である。

新京を後に帰国の途に

昭和二十一年七月十二日、避難途中や方正及び新京での越冬中に亡くなった、幾多の同志の霊に一同黙禱を捧げ、この場に別れを告げ南新京駅から出発、列車では一路南に下り、十九日の早朝錦県に到着し、収容所において検疫や乗船手続などで数日を過ごし、二十四日に出発。壺蘆島に到着すると、検査と検疫を済ませて乗船した。

「VO二十七号」の帰国船に乗りこんだ一行二千五百人は、各々が万感を胸に大陸に別れを告げ、黄昏近く出航した船旅も、幸い波も静かで、二十八日舞鶴港に着いたが、翌日の検疫でコレラ患者が発生したため、上陸目前にして佐世保に回航され、八月三日に佐世保港で再検査の結果、保菌者が続発し、母国を眺めながら四十日の防疫戦を展開した。その間に病氣中の安部仁栄君が上陸を前にして、残念にもこの世に別れを告げた。

九月九日ようやく上陸し、頭からDDTの出迎えを受け支給された衣服に着替え、佐世保収容所にて二泊中諸手続を済ませ、十一日に懐かしの郷里に向かって出発した。列車の窓ガラスは破れており、関門トンネルを通過したら顔は煤煙で真っ黒くなり、途中の駅々では買出し部隊が窓から乗り降りする浅ましさに、敗戦の惨めさを、思わず内地で感じながら上野駅に着いた。

ここから山形の故郷へと気持ちは走ったが、上野の寛永寺に今夜は泊まるというので、寺の青畳の上で手

足を伸ばしていると、佐藤団長から話があると言われ皆が集まって話を聞いた。団長は「君たちの今すぐ故郷に帰りたい気持ちは十分理解しているが、この状況では、生まれた妻家や親戚の者も苦しい生活をしていると思う。皆が帰れば涙して喜んで迎えてくれるけれども、それでも精々一週間ぐらいだろう。『その後の生活は何としてゆく心算か内心困ったものを』という結果になる。それならば、自分が一生懸命に君たちの落ち着き先と生活を安定させるため、もう一度、満州で崩壊した開拓をするから、私と行動を共にしてくれないか」といわれた。そのとき、私たちは郷里の人に会いたい、帰りたいの一心で、団長は何を考えているのかと泣きたい気持ちであった。

しかし、佐藤団長がいなかったら、現在の大八洲開拓は無かったし、私自身どうなったかと思うと、今更ながら佐藤団長の偉大な計画と先見の明に驚くとともに、大いに恥じている一人である。

二日間寛永寺にお世話になった次の日の十四日、内原の義勇軍訓練所跡の日輪兵舎に行き、そこを宿舍と

して、付近の農家の手伝いや空地で麦や野菜を作りながら生活した。その間に団長や高橋辰左エ門さんたちの奔走により、菅生沼の開拓地に入植が決定したので、ようやく皆の者は交代で郷里に帰ることが許された。

それで、兄弟三人は、米沢市の須藤宅を訪問をした。各親族の家を訪ね手厚く迎えられて、十日ばかり過して内原へ戻ったところ、先に帰国中の団員や家族の方たちも集まって内原は大世帯で賑やかになっていた。

入植から再開拓を

十一月十日、現在の水海道市菅生町の樽井区に、第一陣の佐藤団長以下四人が先遣隊で出発した後、私も一行十人とともに第二陣に加わり永住の地菅生沼開拓の一步を踏み出した。とはいっても丸裸同然の集団者、天幕生活と入植早々からの食料難で村の人の厚意でもらったサツマ芋や馬鈴薯などで飢えを凌ぐ有様が一年も二年も続いた。

鬼怒川と利根川が合流するデルタ地帯で、柳の木や茨の茂った原野の間に大小の沼沢があり、魚やザリ蟹などまたは掘り起こしてきたカタツムリや蛇も焼いて

食べることが常であった。

早速、砂地を開いて麦を蒔いたが収穫まで何もないから、食料費稼ぎに男も女も働ける者は、内務省の堤防工事に出てトロッコ押しをした。毎朝、天幕の共同宿舎から素足に草鞋ワラジばきで、サツマ芋を弁当にくる日もくる日も通った。

そのうちに次々と団員の方が集合してきた。父、長兄も二十三年の末ごろ、シベリア抑留から帰ってきたので、兄弟妹たちで喜んだ。

昭和二十四年から現在の守谷町立沢地区の台地の開墾がはじまり、水海道市と守谷町に分かれていたが、生活も経営も、全面共同が三十年秋まで続いた。当時、菅生沼では台風の時節や梅雨のころには、両河川が増水するたびに作付けした作物は、必ずというほど流され収穫は皆無となり、食料難に追い打ちをかけるという状況が、数年続くことがあった。

立沢地区の松材を伐って開墾した土地も酸性の強い赤土の瘦地のため、麦を蒔いても伸びるどころか、草さえも育たないような土質であったから、収穫を得る

まで十年近くかかった。

そのうち両河川の堤防も完成し、台地の方も次第に収穫が進んで、菅生沼では米を専門に作り、丘の方では麦類を耕作、また低い湿地に近い場所を水田に造成、深井戸を掘り揚水を利用して米も作りはじめたので、昭和三十年以降にはサツマ芋主食がようやく麦と米が食べられるようになり、生活も安定の兆しが見えてきた。私も帰国したときは十五歳であったが、皆さんにお世話になりながら同志の若い衆と開墾や農産加工にと、各地区の持ち場を回り働いた積もりである。

二十歳のとき、大原地区の開墾に行っているうちに、共同宿舎の建築のため大工の人手が足りないということで、大工の手伝いに行っている間に見よう見まねで、いつの間にか建築大工の道に進んでしまった。

昭和三十一年春に、迷惑をかけてきた独身時代にも年貢の納め時、結婚、二男一女をもうけた。翌年乳牛の仔牛を導入、酪農にも足を突っ込んだが世話は相棒のかあちゃん任せ、大工、農作、牛の飼育、乳搾りと、それでも朝早くから夜遅くまで、かあちゃんと働いて

きた。しかし乳牛も次第に頭数が増えかけたので、あちゃん酪農では無理と思ひ大工を止め、成牛十六頭と数頭の育成牛を抱え再出発した。

現在、家業は長男夫婦に移譲し、孫二人のお守りやら野菜作りと気楽な日を送っている。

更に、帰国以来一日も忘れることができなかったのは、大八洲開拓団の現地で葬った曾祖母並びに、引揚げ途中望郷の念と帰国の念願も空しく、異国の広野や越冬地の一角であえなく露と消えた、我が母、祖父母、開拓団の仲間たちのことです。せめて一本の線香なりともと思ひ続けて四十数年、私だけでなく、生き残ることのできた皆さんの宿願が、組合の計らいで昭和六十三年七月に実現しました。

訪中とともに、避難の道をたどりながら、越冬場所や開拓の現地にも赴き、その場その場で、日本から用意していった諸々の供物を捧げました。二回目（平成三年六月）の墓参りと慰霊の旅にも参加することができて、永年にわたる私どもの念願を達成しました。

これすなわち、佐藤孝治初代組合長はじめ、先輩や

同志諸君そして入植以来今日まで、温情ある御支援御協力を賜った地元の皆様方のお陰に他ならないと、心から感謝申し上げますとともに、最後に再び戦争による残酷悲惨な経験を繰り返すことのないよう、永遠の平和を念じ筆を置きます。

【執筆者の横顔】

昭和十四年一月大八洲開拓団（第十三次集合）の先遣隊として入植した父の元に、十月渡満した田中君は九歳であった。大八洲在満国民学校を卒業し、千振農学校に入学、第四期生として在学中、終戦のため在団者と共に、大八洲開拓地を引き揚げる途中、悲惨と恐怖の逃避行となり、越冬の辛酸な約一カ月の流浪生活を体験した生き残りの一人である。終戦近くの総動員により残った数人足らずの壮年男子と共に、避難途中多数の老幼、婦女子の面倒をよく見てきた田中君である。

昭和二十年八月三十一日暴民の襲撃に遭難した際、後退して、本隊と別れた方正残留組は、越冬生活中に

二十人の死亡者が続出し、翌年二月十五日脱出した者は十四人に過ぎなかった。滞在中の元気な者は田中君の他に二、三人のみとなり、病人の世話から亡くなった同志の埋葬、そして暖房の薪集め、その間には病人の栄養になる食物を買うため、中国人の雇用に働くなど年少ながら越冬組の中核となり奮闘した。

母親と祖父母を亡くした田中君は、帰国した弟妹三人を連れて二十一年十一月、戦後入植の大八洲開拓に参加した。

召集で現地部隊に入隊後、消息不明だった父親は二十三年十一月に帰還したことは、田中君兄妹には無上の救いであった。再入植した婦女子を多く抱えた開拓で、田中君は組合の建築要員として引つ張られ、大工の仕事に携わりながら酪農を営み、出勤前の早朝と、勤めから帰ったら暗くなるまで夫婦で働いた。素住台地区（田中君を含め二戸）開拓地の移転建築が、昭和四十九年に完了したのを機会に勤めをやめ、後継者の長男と本格的に取り組んだ酪農を規模拡大するとともに、経営も長男夫婦に移譲した。

大八洲開拓も、入植五十周年を迎え大八洲神社の社殿（神殿の上屋）を造営したが、田中君は一カ月間にわたる神社建築に作業奉仕（無償）した。まことに奇特な行いの持ち主である君の側面を述べ、横顔の一端とする。

（大八洲開拓農業協同組合

代表理事組合長 石田 時雄）

一 ハルビン学院生の手記

東京都 吉 兼 三 郎

昭和十九年、戦火はようやくわが国の周辺に迫り、一億総火の玉、すべてを投げ打って祖国の聖戦を完遂せんと、軍民挙げて努力していた時代でした。私はちょうど十八歳、中学五年生（旧制）で、進学を決めねばならぬ年でした。

高等商業学校と大学予科の受験は決めておりましたが、ちょうど一月末ごろでしたか、学校の掲示板に満